

予約 1月末入荷

# タルトレット・ワンダーランド



文庫 326頁 上代900円

技巧を凝らしたタルトをX回食べ尽くすまで

ループを続ける少年たちの、

ポップで可愛くてリアルで苦い青春小説。

成長の光と影は、大人にこそ刺さる。

初版50部が一日で即完！ 只今増刷中

ら、俺も気持ち少しほぐれるのを感じていた。

「じゃあ、メニュー決めるか。俺はタルト一択だけど、辻も？」

「ああ、俺も……ドリンク、どうしよう」

二人でメニューを順に見ていく。トネリコはスイーツはタルトのみだが、分厚いメニュー一冊分のドリンクを取り揃えている。俺はドリンクに関しては、もうずっとアワダさんにおすすすめを聞いて注文していたから、メニュー表をじっくり見るのは久々だ。辻が「おっ」と声を上げた。

「これ、面白い。コーヒーと紅茶を混ぜたドリンク、って」

「そんなんあんの?!」

メニュー表の最後のページ、確かにそれは載っていた。鴛鴦茶えんおうという、台湾の飲み方らしい。

「いいね、俺コーヒー得意じゃないけど、これならいけそう」

「俺も、あんまり得意じゃ、なかった」

辻は妙にしんみりとしている。アップダウンの多い辻の一喜一憂にいちいち反応している。日が暮れそうなので、手を挙げて「すみません」と大きめの声で呼んだ。

また、妙だな、と思った。さっきの男性店員が、この二階の喫茶室に居たからだ。

いつもなら、レセプションの店員と、店内でサーブや会計をする店員と、しっかり役割分担している。外で入店案内をしていた男性店員が、今俺達の注文を取っている。これは普段からするとイレギュラーなことだ。そんなことは知らない辻は、

「タルト二つと、温かい鴛鴦茶二つ、お願いします」と丁寧と言った。

「鴛鴦茶は、ミルクと砂糖をたっぷり入れたものと、ストレートのものとあります。どちらになさいますか」

「え……おま、平岩どっち」

辻、「お前」の66%を言っちゃったなら、もうお前って呼んでもいいんだぞ。四捨五入したらそれは「お前」なんだよ。

「俺は、ストレートかな」

「じゃあ、俺も」

店員の「かしこまりました」という明瞭な声が、ぱちんと耳に響いた。それを合図に、俺の違和感は、雨水が地中に染み込むように、心に馴染んで見えなくなった。そういうこともあるだろう、とひとりごちていたら

「何かあったのか」

唐突にそう聞こえ、俺は思わず周囲を見回した。正面から、

「いや、おま……平岩、に言った」

と辻の声がした。

辻から話を振るなんて、しかも内容が、俺を案じるものだなんて。質問に質問で返して申し訳ないけれど、聞いた。

「なんで、そう思った？」

「だって、明らか元気ないって言うか、テンション低いし、声もちいせえし」

辻がデカめのブーメランを投げてきたので、それが辻に刺さらないようにしっかり受け取る。そう見えるかあ、と言った後、続けた。

「不完全燃焼かつ、後悔かつ、自己嫌悪、つてとこ」

「アンハッピーセットだな」

「そのたとえ、割と好き」

「ありがとう……さつき、俺も思ったんだ。自分に対して」

俺も思ったこと、とは、「そのたとえ、割と好き」じゃなくて、「アンハッピーセット」の方だろう。それっきり、辻は話さない。ただただ、俺達の感情が今、同じ波形を描いていることを確かめているようだった。何の解決にもならない連帯は、意外と

悪くない。「そうかあ」と、もう言わなくても伝わっているだろう言葉を口にして、俺は沈黙した。

「お待たせいたしました、八朔とミントのタルト、鴛鴦茶でございます」

波長をかき乱す、男性店員のやけに明るい声が降ってきた。テーブルの上、二つの円いタルトはライトを浴びる。浴びた光を、八朔の実とごく薄いグリーンのクリームがそのまま反射する。光に遅れて、ミントの涼しい香りがやってきた。辻が小さく「ありがとうございます」と言ったので、俺はそれを伝えるタイミングを失ってしまった。

タルト台の上には、白い中にちらちらと、刻んだミントの葉を覗かせるクリームと、うす黄色の八朔が円錐型に盛り付けられている。その登頂部にミントの葉が愛らしく載せてある。ゆつくりと、八朔めがけて縦にフォークを刺す。八朔がクリームの中に沈み、やがてタルト台に行き当たる。ぐっと力を込めて、生地を割るように切った。タルト台と、クリームと八朔とを、サツと口に入れた。

果肉がゆつくりと弾け、クリームは雪崩れ込むように舌を覆う。ゆるい液体のような彼らを、タルトの生地を利用して噛みしめる。乳脂肪のコクと甘み、ミントの冷たい爽やかさ、八朔の酸味苦味が一つになる。

鴛鴦茶は、濃いめの紅茶のような色をしているが、香りはコーヒード。ひと口啜ると、意外にも紅茶の味が先に来た。じんわりとコーヒートの苦味が遅れてやってくる。二つを同時に味わうことで、俺は、紅茶とは砂糖を入れなくとも甘いものなのだ、ということを知った。口の中にはまだミンツの風味が残っている。ミンツという風味の強いハーブを使ったスイーツだからこそ、鴛鴦茶に対抗出来るのだろう。

辻は、すごくいいチョイスをしてくれたんだ。

美味しい。どうしたって、どんなにアンハッピーセット喰らわされた時だって、トネリコのタルトは憎らしいほどに美味しい。こんな美味しいものを、アワダさんと食べたかった。今日のタルトだけじゃない。この先にあつたかもしれないタルトを、三回、五回、いや十回は、共に味わいたかったのに。その先で、俺の気持ちをきちんと伝えたかった。

「承りました」

左耳に、あの男性店員の声が凜と響いた。いや、耳を経ず、脳の中に直接差し込まれたようだった。え、と思つて顔を上げる。誰も居ない。そして、辻もまた俺と同じ

く、ぼかんとした顔で、二〜三メートル先を見ていた。

「あのさ」

「今」

俺たちが発した声が、そして視界の中の辻が、ぐにやりと歪んだ。だから辻がどんな表情をしていたかは分からない。

手を正面に伸ばしたいが、右手に握ったフォークが接着剤でくっつけられたように、俺の指を固定していた。皿の上のタルトだけが美しく佇んだままだ。俺はゆっくりと、ゆっくりと。